

南半球便り（その 97）：ニューカッスル大学卒業式祝辞

12 月 16 日

今なお意識が低い向きもありますが、外交官の仕事の中で、最も重要なひとつがパブリック・スピーチ。任国の言語・文化・風習を習得し、聴衆の感情や考えを踏まえた上で、先方の日本に対する共感や理解を深め、できれば、心に響くような話をする事ができるか？「口舌の徒」などと切り捨てられないためには、長年の鍛錬の成果と場数を踏んだ力量が問われるのです。

1. 大学卒業式

豪州に着任した際、友好国の熟練外交官が助言してくれました。

「シンゴ、豪州勤務の間に、ナショナル・プレス・クラブでの講演と、主要大学の卒業式の祝辞の両方をやれるよう目指したら良い。」

キャンベラのナショナル・プレス・クラブは、豪州でスピーチを行う場としては、もっとも格と難易度が高い場です。テレビの生中継で全国放送。プレッシャーも相当です。さいわい、昨年 7 月に貴重な機会が与えられたことは、この[南半球便り（その 23）](#)でご報告したとおりです。着任後 2 年になりますが、その間に各国大使でその榮譽に浴したの、日本の他にはフランス、中国、ウクライナと、極めて限られます。



ナショナル・プレス・クラブでの講演の様子

かたや大学卒業式は、どの大学でも最も重要な行事です。在校中の厳しいカリキュラムをこなして卒業証書を手にする学生、そして学生生活を物心両面で支えてきた両親や家族にとって、まさに晴れの日。入学式に重きを置く日本の大学とは好対照かもしれません。

2. ニューカッスル大学

読者の方々には、「なぜ、ニューカッスル大学の卒業式に日本大使に声がかかったのか？」と問われる方もいるでしょう。それは謎です（笑）。

ただ、今年1月にニューカッスルを訪問した際、水素の導入に熱心に取り組んでいる同市、同大学の関係者と意見交換をする機会に恵まれ、彼らの面識を得ていた経緯があります。出張の積み重ねが生きたとも、いえましょう。

ニューカッスル大学の関係者の中では、東大法学部とコロンビア大・国際関係論大学院で学んだだけでなく、東大公共政策大学院で国際法のゼミを教えていたこともある私の経歴に興味を示し、普通の大使とは違う話をしてくれるだろうという期待もあったと聞きました。

また、ゼリンスキー学長がシステム工学、コンピューターサイエンス、ロボット工学を専門とし筑波大で研究していたこと、アンダーソン教授が北大で教鞭を執っていたことも、大きな要素でした。

3. ニューカッスル再訪

冒頭の同僚外交官のアドバイスもあったので、大学から招待状を受けるや否や、二つ返事で快諾。でも、実際にニューカッスルに行くのは、そう容易ではありません。キャンベラから、およそ車で5-6時間もかかる距離なのです。



ニューカッスルの位置（NSW 州政府ホームページ掲載地図を編集）

本来であれば、飛行機で行くと楽なのですが、コロナ禍後の航空賃の急騰もあり、出張旅費が逼迫。そこで、体への負担は大きいものの、陸路車で移動し、卒業式に臨みました。

ニュー・サウス・ウェールズ州の北部に所在し、長年石炭の積み出し港として日本との貿易

でも大きな役割を果たしてきた町です。前夜には同地に居住し、石炭貿易に深く関わっている在留邦人の方々と、じっくりと懇談する機会を設けられたのは幸いでした。



晴れ上がったニューカッスルの港

ちなみに、日本が輸入している石炭の約7割は豪州産。その多くがニューカッスル港から積み出されています。脱炭素社会の実現に向けて化石燃料からの転換を目指すことは言うまでもないとして、あくまでも漸進的、現実的なアプローチをとることの必要性をニューカッスルの現場は教えてくれました。

4. 当日の模様

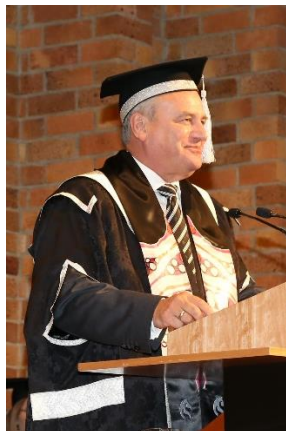
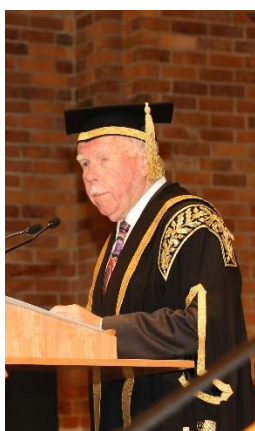
さて、卒業式当日。実は、学生が多数にのぼり、かつ、すべての学生に直接卒業証書が手渡されるので、12月12日から14日までの3日間にわたり、卒業式が10回近くに分けて行われるのです。したがって、祝辞を述べる来賓も10名に上り、ジュリア・ギラード元首相まで名を連ねるほどの豪華キャスト。私などに声をかけて貰い、汗顔の至りでした。

私が出席したのは、14日の午前の部の卒業式。送り出す学生は約350名。1200名は収納可能とされる大ホールは、卒業生だけでなく、父兄や友人でほぼ満員となりました。



卒業式の模様

ジーンズ理事長、ゼリンスキー学長他と並んでガウンをまとして式に臨み、祝辞を語りました。型どおりの挨拶では平板すぎると思い、恥を忍んで自分の受験の失敗や、思い通りにいかなかった役人生活の経験を振り返りつつ、日本の諺を紹介。明日の社会に漕ぎ出していく若者への贈る言葉としました。



左からジーンズ理事長、ゼリンスキー学長、筆者、卒業生代表グリーン氏

「七転び八起き」「井の中の蛙、大海を知らず」「歳月、人を待たず」「孝行のしたい時分には親はなし」といった諺を、自らの半生を顧みて、自分自身に問いかけるように語ってみました。心優しい豪州の学生達は目を輝かせて、よく聞いてくれました。

【私の祝辞は、[こちら](#)でご覧いただけます。】



ジーンズ理事長（左）、ゼリンスキー学長（右）と

一つ残念だったのは、卒業証書を受けとった 350 名の学生の中には相当な数の中国人学生や韓国系学生がいた一方、日本人らしき学生が一人も見当たらなかったことです。そこで、「来たれ日本人学生、豪州へ。」とシャウトしておきましょう。

5. 反響

嬉しかったのは、大学関係者からいただいた賛辞に加えて、講演後に何人かの父兄が近づいてきて、「凄く良い話をしてくれた。」との言葉をいただいたことです。

そのうちの一人の父親は、「息子が卒業した。」と誇らしげに語りかけながら、「貴方のスピーチに感動した。ありがとう。」と言ってくれました。こんな時、命を受けて豪州の地で大使を務めていることの喜びを感じるのです。

今年、最後のビッグ・スピーチ。豪州を熟知した大使館広報文化班の現地スタッフと額を付き合わせて綿密に打ち合わせを重ね、彼らの際だって高い能力無くしては成し遂げられなかったスピーチ。実に大きな達成感を得ることができました。

山上信吾